

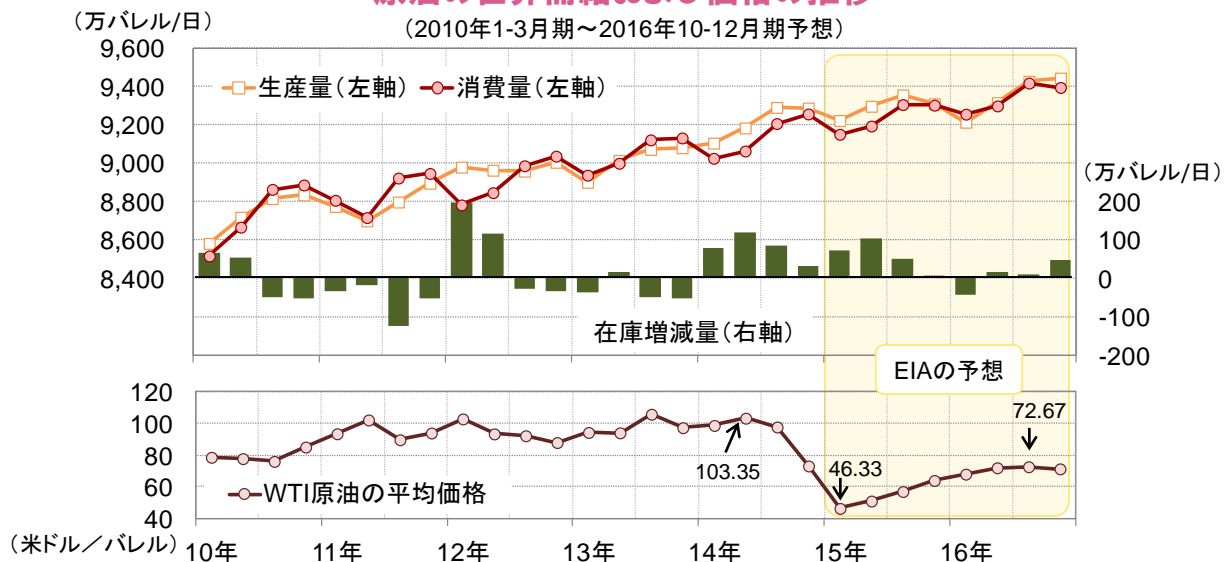
## 原油を取り巻く環境は複雑多岐

原油市況は、供給が需要を上回る状態が続いていることなどから、昨年半ば以降、低下傾向となっており、13日にはWTI先物価格が一時1バレル＝44.20米ドルと、2009年4月以来の安値をつけました。およそ7か月で6割弱の低下という、原油安のペースの速さに加え、先行きの見通しが容易でないことなどから、投資家の間にリスク資産を避ける動きが見られます。

こうした中、米エネルギー情報局(EIA)は、13日に公表したエネルギー見通しの中で、在庫が増加する状況に変化が無いことから、原油価格がこの1-3月期も下落するとの見解を示しました。ただし、価格低下を受けてOPEC(石油輸出国機構)非加盟国、特に米国の原油生産の伸びが鈍化すると見込まれること(2014年:前年比+16%、15年:+7%、16年:+2%)などを背景に、需給関係は徐々に改善に向かうとして、在庫の増加は今年上半期がピーク、価格はこの1-3月期を底に、16年半ばにかけて上昇すると予想しています。16日には、国際エネルギー機関(IEA)も、OPEC非加盟国での原油生産の伸びが鈍化するとして、需給の均衡が見込まれる今年後半に原油価格が回復するとの見通しを発表しました。

ただし、米国では、技術の進化などに伴ない、シェール・オイルの生産コストの低下が続いており、原油安に伴う生産への影響は限定的との見方もあります。一方、OPECについては、昨年11月の総会で減産見送りを決定したものの、例えばベネズエラの場合、外貨準備の減少などに伴ない、債務不履行の可能性を懸念されるほど厳しい状況にあり、暴動の発生によって原油生産に影響が及ぶ恐れがあります。また、原油価格の下落は、産油国には痛手でも、原油を輸入に頼る国には恩恵となることから、世界全体では差し引きでプラスの材料となり、景気を押し上げたり、原油需要の回復・拡大を促す面もあります。原油には、これら以外にも多くの要因が複雑に絡むだけに、短期的な価格動向に振り回されないことが肝要と考えられます。

## 原油の世界需給および価格の推移



EIAのデータをもとに日興アセットマネジメントが作成

※上記は過去のものおよび予想であり、将来を約束するものではありません。

■当資料は、日興アセットマネジメントが市況等についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。